九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

ルバテ＝クストー『敗者たちの対話』

松尾，剛

https://doi.org/10.15017/8819

出版情報：Stella. 25, pp.137-142, 2006-12-20. 九州大学フランス語フランス文学研究会
バージョン：
権利関係：

ルバテ＝クストー『敗者たちの対話』

松　尾　　剛

かつてドリュ・ラ・ロシェルは，死の直前にしたためた文書のなかで「後世の人びとは多数派とは別の声を聴き取ろうとして，興味津々で私たちのうえに身をかがめるだろう」と述べたが，少なくとも彼自身にかんして言えば，この〈予言〉は成就したと見て差しつかえあるまい。じっさい，久しく入手困難であった小説類が復刊され，日記や書簡集などの一次資料までもが発掘・刊行されているのである。かつてはタブー視されたこの対独協力作家にフランス読書界の視線が注がれはじめたことは明らかだろう。これに呼応するかのようにアカデミズムにおけるドリュ研究も活発化している。1993年のソルボンヌでのコロック開催を皮切りに，1997年にはリール大学に本拠地をおく雑誌『小説20-50』が特集を組み，2001年にはジャック・ルカルムの，2003年にはフレデリック・ソマドのドリュ論が刊行された。いまやドリュはアカデミックな研究対象としても認知されつつあるのだ。

ではリュシアン・ルバテについてはどうであろうか。ナチス＝ドイツの占領下に『残骸』と題するパンフレを出版し，反ユダヤ主義を指嗾した悪名高きファシストでありながら，戦後には「現代文学の隠れた傑作」[1]とまで讃えられた恋愛小説『ふたつの旗』をものしたルバテ。この「恥のリュシアン」[2]もまた，ドリュほどではないにせよ，フランス人の耳目を集めはじめているように思われる。まず1993年には『獄中書簡』が刊行され，翌年には歴史家ロベール・ブロによる浩瀚なルバテ伝が出版された[3]。今世紀に入ってからは，ワシントン大学のパスカル・イフリが未刊資料を駆使した作品論と，簡にして要を得た評伝を出版[4]。さらには，この流れにあやかろうとしたのか，右翼系批評家ポル・ヴァンドロームの手になる40年前のルバテ論までが再刊される始末で，世はちょっとしたルバテ・ブームの観さえ呈しているのである[5]。

だが再評価とはいっても，実態は玉石混淆というのが偽らざるところで，純

粋に学的興味からなされた研究もあれば，イデオロギー性の濃厚なものも少なからず存在する[6]。さらには，エチアンブルが「じつに素晴らしく，じつに力強く，これ以上を望むことさえできない書物」[7]とまで激賞する『ふたつの旗』が，はたしてそれほどの傑作なのかと訝しむ向きもあり[8]，近年の出版ラッシュをもってルバテ復権を云々するのは少々軽率にすぎるかもしれない。だがそれでもやはり，彼をめぐる一次資料が刊行され，あるいは未刊資料を用いた研究がなされること自体は，充分に意義深いことではなかろうか。スタイナーも主張するように，「公然たる野蛮行為が，秩序だった想像力によって支えられた古典芸術作品と共存」するルバテの存在は，「文学的ヒューマニズムと政治的サディズムとの間にはなんら関連性がないと言う謎」を我々に突きつける[9]。とすれば彼の総体を改めて学術的調査・研究の対象とすることは，西欧文明の根幹に存在する〈啓蒙の弁証法〉を考え抜くことにほかなるまい。

本書『敗者たちの対話』の出版もまたこの流れに棹さすものと考えてよいだろう。同書はクレルヴォー監獄に収容されたルバテが，盟友ピエール＝アントワーヌ・クストーとともに，獄中で続けた対話の記録である[10]。校訂者ロベール・ブロの指摘を俟つまでもなく，解放後に〈粛正〉されたファシスト作家たちの肉声を聞くのは困難を極める。戦後のある時期まで，彼らが公的に声を上げる機会は皆無に等しい状況が続いたため，〈粛清〉の嵐吹き荒れるなか，〈コラボ〉作家たちがじっさいに何を考えていたかを触知するのはほとんど不可能に近い。その意味で，「ただ自分のためだけに，金儲けなど念頭になく，印刷公表も考えず，想定される読者にも出版社にも拘束されず，プロパガンダの意図などかけらもなしに」獄中で練り上げられた本書は，〈粛正〉された者たちの本音を探るには最良のコーパスであり，「それゆえ本書の刊行は，ひとつの事件なのである」。

それにしても一読して驚かされるのは，ルバテ，クストーともに何ひとつ悔いることなどないと言明するどころか，ファシストとしての過去をいかにも輝かしいものとして描き出すことであろう。「このファシズムの冒険を生きたことを日々誇りに思っている」クストーは，これこそがサルトルのいうアンガージュマンだとうそぶき，他方「逃げだした連中を，ブルジョワのモグラどもを，苦難のときに家に身を潜めている奴らを罵倒したのは間違っていなかった」ことを確信するルバテは，「自分が連中と同類ではなかったことに満足している」

と述べる。だがいかにスキャンダラスに見えようとも，この居直りとも評すべき見解は，すでにタイトルのなかで黙示されていたのではなかったか。そこに記されていたように，対独協力者とは，世界の支配権をめぐる戦いの「敗者」であり，その意味ではなるほどレジスタンスは「勝者」である。しかしながら，これすなわちファシズムの過誤とはならない。弱肉強食がこの世の法である以上，今はレジスタンスの価値観が一世を風靡しているが，もしナチス＝ドイツが勝利していたら，我々の大義が世の趨勢となっていたはず。よってファシズムそれ自体を悪と決めつけることはできない。すべては善悪の彼岸にあるのだから――そう彼らは考えるのである。

ファシズムを経験したふたりの間には微妙な，しかし決定的な差異が横たわっていることを見逃してはなるまい。そもそもジャーナリストとして，つねに政治問題を本分としてきたクストーにとって，ファシズムへのアンガージュマンが「運命」であったのに対し，「20 歳のとき，社会に〈否（ノン）〉を告げた」ルバテにとっては，対独協力など所詮寄り道のひとつにすぎなかった。それゆえにこそ「もう一度あらゆる社会に，あらゆる人間の集まりに〈否〉を突きつける」ことを，ルバテは決意するのである。このふたりの対立からは，一枚岩として考えられがちな対独協力も，じつは同床異夢であったことが看取されよう。じじつ，社会との関わりを忌避するあまり復讐すらも厭わしく感じるルバテは，「自分が連帯を感じることのできる共同体が，いまだこの地上に存在する」と告白したクストーを嘲弄する。ルバテにとって「無上に価値あるもの，そのためになら命を捨てても惜しくないものは，ヨーロッパの芸術遺産」だけなのだ。同じファシズムの大義を奉じながらも，よって立つ価値観の相違が白日の下に曝された瞬間である。

だがふたりの齟齬が最も興味ぶかい形で露呈するのは，第 13 対話「クリオを救え」であろう。歴史の女神に捧げられたこの対話において，クストーは歴史記述の相対性を主張する。彼によれば，歴史とはひとつの物語にすぎない。というのも「歴史を書くということは選択することであり，つまりはもろもろの出来事からこのうえなく興味ぶかいと思われるものを選び出すこと」であるからだ。とすれば歴史は歴史家の数だけ存在することになり，畢竟歴史における超越的真実の存在は否定されるほかないのである。

このような〈ポスト・モダン〉とでも形容すべき主張に対し，ルバテは激し

く反発する。彼にとっての歴史とは一定の法則に貫かれたものであって，それを無視した歴史記述など成立するはずもなかった――「歴史には常数のようなものがあって，それは最も揺るぎない科学の法則よりも，はるかに揺るぎないように私には思われる。〔…〕この恒常性を信じ，そこに政治を適応させることが，つまりは歴史を信じることなのだ」。ではルバテが信じている歴史の常数とはなにか。それはフランスの没落である。「フランスにおけるデカダンスの軌跡は歴史に書き込まれている」。なぜなら「歴史が示しているのは，民主主義は国民を堕落させるという事実であり，周りを見てもフランス，イギリス，ワイマール憲法のドイツと，いくらでも例がある」。よって共和国の没落は免れない。そもそも「歴史がまったく相対的なものであるとすれば，百年の後には第４共和制の人間たちに栄冠が授けられる可能性を認めねばならなくなるが，この命題はまったく考えがたいことである」――かくのごときルバテの〈論証〉と，クストーの歴史観との間にどれほどの径庭が存在するかは言わずもがなであろう。

しかしながら，いっそう注目に値するのは，ふたりの対照から垣間見える対独協力の実態ではあるまいか。校訂者も指摘しているとおり，それは同床異夢とも呉越同舟ともいうべき運動であった。ナチズムに熱狂するルバテとクストーですら根本的な動機を違えていたように，「ジュ・スイ・パルトゥ」誌内部においても彼ら〈過激派〉とブラジヤックら〈穏健派〉との間には深刻な対立があったことを想起しよう。またパリに残った対独協力派とヴィシー政権に集ったペタニストとの対立を無視しては，占領下のフランスを理解することはおぼつくまい。なるほど後世の視点から見れば，彼らは同工異曲の存在でしかないだろう。とはいえ，彼らのあいだに存する微妙な差異を見分けようとしなければ，歴史の真実に近づくことなどできはしまい。本書の読者はルバテ＝クストーをモデルケースとして，対独協力者の実態を再認識することができるのである。やや旧聞に属する出版ではあるが本書を取り上げた所以である[11)]。

註

１）ジョージ・スタイナー『脱領域の知性』(由良君美他訳)，河出書房新社，1981 年，

77 頁。

2）Jean–Perre RIOUX, «Lucien–la–honte», *Le Monde des livres*, 15 juillet 1994.

3）Lucien REBATET, *Lettres de prison adressées à Rolland Cailleux 1945–1952*, édition établie, présentée et annotée par Rémi PERRIN, Paris : Le Dilettante, 1993 ; Robert BELOT, *Lucien Rebatet. Un itinéraire fasciste*, Paris : Éd. du Seuil, coll. «XXe siècle», 1994.

4）Pascal IFRI, *«Les Deux Etendards» de Lucien Rebatet. Dossier d'un chef–d'œuvre maudit*, Lausanne : L'Âge d'homme, 2001, et *Rebatet*, Puisseaux : Pardès, coll. «Qui suis–je ?», 2004.

5）Pol VANDROMME, *Rebatet*, Puisseaux : Pardès, 2002［réimpression de l'édition de 1968 publiée aux Éditions Universitaires］.

6）たとえば 1999 年と 2002 年には，「ジュ・スイ・パルトゥ」誌に掲載されたルバテの記事を蒐集した単行書が相続人の許可なく発行されているが，そこに寄せられた無署名序文を一読すれば，編者のイデオロギー的立場は明白である。またこれと同列には論じられまいが，『獄中書簡』刊行にもイデオロギーの問題が伏在していることは指摘しておこう。版元であるディレッタント社は，ブルジョワ的良識への挑戦を社是とするアナキスト系出版社である（voir Raphaelle REROLLE, «Dix ans de Dilettante», *Le Monde des livres*, 10 mars 1995）。さすればルバテの書簡集出版も，文学的・学術的価値に鑑みての決断というよりは，公序良俗にたいする挑発として企図されたと考えても，うがちすぎとは言えまい。

7）ÉTIEMBLE, *Hygiène des Lettres II. Littérature dégagée 1942–1953*, Paris : Gallimard, 1979, p. 205. これに関して付言すれば，エチアンブルはこの発言が原因でサルトルに「レ・タン・モデルヌ」誌を〈破門〉されている。

8）「ル・モンド」紙の編集長を務めたフレデリック・ゴーサンは，『ふたつの旗』は「良くできているが，偉大な小説ではなかった」とし，「ルバテは，セリーヌやブラジヤック，あるいはドリュのように，文学的才能によって汚辱から〈救出される〉という死後の満足を得ることはないであろう」と断じている。Voir Frédéric GAUSSEN, *Les Enfants perdus du XXe siècle*, Paris : PUF, coll. «Perspectives critiques», 2000, p. 40.

9）スタイナー前掲書，76–78 頁。

10）Lucien REBATET et Pierre–Antoine COUSTEAU, *Dialogue de "vaincus" (prison de Clairvaux, janvier–décembre 1950)*. Texte inédit présenté et annoté par Robert BELOT, Paris : Berg International Éditeurs, coll. «Histoire des idées», 1999. 著者のひとりピエール＝アントワーヌ・クストー（1906–1958）は，主として「ジュ・スイ・パルトゥ」誌で活動したジャーナリスト。初期には左翼的立場に立ち，反軍国主義・反カトリシズム・反愛国主義を標榜していたが，ピエール・ガクソットに導かれて「ジュ・スイ・パルトゥ」寄稿者となってからは，反ユダヤ主義的傾向を強め，ナチズムに魅入られていった。占領下に出版された彼の『ユダヤ

的アメリカ』は，ドイツ宣伝局の推薦書リストにもその名を連ねている。パリ解放時に国外逃亡を図るも逮捕され，ルバテとともに裁判にかけられた。判決は死刑。しかしながら，その後罪一等を減じられ，終身強制労働に処される。1954年恩赦。解放後も「リヴァロル」をはじめとする極右紙で活動を続けた。なお著名な海洋学者ジャック＝イヴ・クストーは，彼の実弟である（voir Michaël LENOIRE, «Pierre–Antoine Cousteau», in *Antisémitisme de plume 1940–1944. Études et documents*. Ouvrage dirigé par Pierre–André TAGUIEFF, Paris : Berg International Éditeurs, coll. «Pensées politiques et Sciences sociales», 1999, pp. 389–395）。

11）参考までに付言すれば，本書の出版直後，ルバテとクストーの相続人らが販売差止請求を大審裁判所に申し立てている。しかしながら「請求者たちが，ルバテ＝クストーの死後出版物に関する権利者であることを証明できなかった」ために，請求は棄却された（voir Georges NATAF, «Droit de réponse des Éditeurs Berg International», *Le Figaro littéraire*, 2 décembre 1999）。なお校訂者が原稿の入手先や現在の所在などに一切言及していないため，出版に至る経過の詳細は不明である。しかしながらパスカル・イフリによれば，ピエール＝アントワーヌ・クストーから歴史家ダニエル・ゲランに対し，実弟ジャック＝イヴの存命中はけっして印刷公表しないことを条件にタイプ稿が手渡されたという（voir IFRI, *Rebatet*, op. cit., pp. 46–47）。